

ライデン民俗博物館所蔵

桂川甫賢『人面瘡凶説』について

片桐 一男

今泉源吉氏の著された『蘭学の家の桂川の人々〔統篇〕』（昭和四十三年、篠崎書林、刊）の「第三章 六代桂川甫賢（くにやうすけ）」をみると、甫賢が目に触れたことをそのまま記した小冊子の紹介があつて、その内容には興味の尽きないものがある。そのうち、「丁酉嘉平七日」と表紙に書かれた雑記は、天保八年丁酉（一八三七）十二月から筆を染め、翌年の天保九年戊戌（一八三八）に及んでいる見聞録であるというが、その八枚目裏に、

南宋

。雞峰普濟方十卷 人面瘡 菑庭藏

と書付けられているという。（三四八ページ参照）

今泉氏は、右に解説を次のように付けられた。

菑庭は、多紀元堅であるが、元堅は、天保十四年癸卯（みづのう）（一八四三）七月二十五日に、所蔵の医書百部を医学館に献納して、金一枚と時服二とを拝領した。その医書の目録の中に、「鶏峯普濟方三十卷清板 十冊」がある。甫賢はこのころ、元堅とよほど親しくしていたらしい。人面瘡は甫賢の研究題目であつた。

「人面瘡は甫賢の研究題目」とされながらも、この件に関する甫賢の研究成果については言及されていない。その存否や如何。

『国書総目録』で検索してみると、桂川国寧甫賢の著作として『人面瘡図説』なる一冊が東大の鵜軒文庫に唯一点存在していることが記載されている。ただし、同書は筆者未詳の写本である。してみると、「人面瘡図」そのものは日本に伝存していないものであろうか。

ところが、オランダ国ライデン市にある、Rijksmuseum voor Volkenkunde 国立民俗博物館には木版本の『人面瘡図』ならびに『人面瘡図説』が二点も所蔵されている。コール・ナンバーは「1 N 4396」であるから、実にシーボルト・コレクションに含まれているものである。

二点は同版であるが、うち一点の方には、木版刷の人面瘡図の上にあとから淡彩が施されており、立体感をあらわしている。図説の末尾に記されている「文政己卯中元 桂川甫賢国寧 記 ㊦㊦」のあとに朱筆で

den 15 van Stigunats 2jaar Boenseij Aq 1819

aldus Geschreven door Katsugawa (Caneel Rivier) Hoken (mijn Japansch en Chineesnam)

と記入されている。年月日と姓名の翻訳表記であることがわかる。注目したいのは、Katsugawa Hoken と記したあとに *Mijn Japansch en Chineesnam* (私の日本語と中国語名) と断っていることである。名と号を指していることであろうが、特に「私の」と明記しているから、甫賢自身が自筆で、かく朱字で注記し、図にも淡彩を施して、親しく贈った記念の品であることが判明する。「桂川」を *Caneel Rivier* と訳を付けてもいる。

図は蘭学界に馴染の深い南小柿寧一が写したもので「南小柿甫祐寧一写㊦」と謹厳に署名と一顆を入れている。一枚刷を折本に仕立たもので、折った表紙となる面には、

人面瘡図説 桂川甫賢

人面瘡圖 桂川甫賢

とある。原図は絵筆にも才能のある甫賢が描き、それを南小柿寧一が写したことがわかる。図説の一文と、出版に到った経緯を説明した「授業弟子」七名の一文とを、まず、続けて読んでみれば次の通りである。

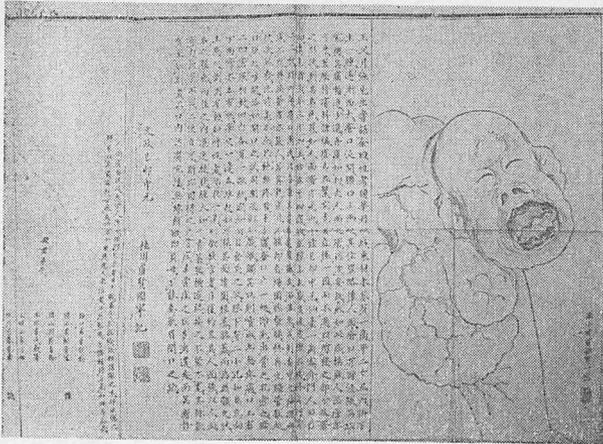
人面瘡圖 桂川甫賢

王父月池先生嘗語余曰、祖考国華君曰、城東材木巷有二商、年二十五六、膝下生一腫、遂漸而大、瘡口泛開、膿口三兩処、其位置略像人面、瘡口有時洪痛、滿以紫糖、其痛暫退、少選再痛如初、夫人面之瘡、涉妄誕、然如此症、称做人面瘡亦可乎、蓋歷穉穡科諸編、瘡名極繁、究竟其症係一因、而不過以所發之部分及瘡之形状、別其名色耳、如人面瘡亦是也、今茲巳卯中元、仙台一商客、介門人田君御、遠來請治、年三十加五、始在二十四歲時、左脛上生腫、潰後流膿不竭、終出朽骨三枚、經四年、瘡口漸收、只全腫不消、步履頗難、故浴温泉、或刺委中之絡瀉血、感不応、転換医者亦数人、荏苒幾歲月、其腫却自増、困膝襲腿、終再生膿管數処、彼収此発、比前甚不全、只絶無疼苦、至今歲瘡口止一処、即先出骨之孔旁也、瘡口脹起哆開、恰如開口之状、周圍淡紅如唇、微触其口則噴血、亦無疼痛、口上有二凹瘡痕相對、凹内各有二皺紋、宛如閉目含笑之状、眼下有二小孔如鼻孔、向下兩傍亦各有痕、痕之一辺各堆起如耳聾、其面精円、根基膝蓋、而為頭顱之状、且患処惻惻有動、如呼吸者、揭衣一見、則似欲言者、非復約略具人面強以人面名之類也、而脛之内廉連腿股、腫大如斗、青筋縱横遮絡、按之不緊不寬、其脉數有力、飲食不減二便可、斯症固得之多骨疽、多骨疽之症多出遺毒、而其瘡勢有至如斯者、只口内汚腐充填、無縁餌糖、即貝母不能聚眉閉口之功、

文政巳卯中元

桂川甫賢国寧記□□

人面瘡図説成矣、世人伝聞、踵門乞求者日十数、写手不暇給、故相謀彫之木、印出応之、師家以「荷蘭瘍科」、世飛名、四方千里外、患人求治者、日月輻湊、吾儕頼得与見如此奇症、矣、



樋口甫晋保利

勝田甫閑景亘 謹

腰山周節貞幹

授業弟子 生田甫成義厚

上田立章信住

桂川甫春克柔

坂部周績包利

識

ここにみえる授業弟子に注目したい。桂川家に笈を負うた授業弟子は、前後にわたり、おそらく相当の数にのぼったであろうことは想像に難くない。しかし、同家の門人帳というようなのは遺っていない。したがって、その門弟の名を把握することは困難をきわめている。甫賢の頃については、天保十五年五月十日の起筆にかかる『墮涙日録』に数人の門弟の名がみえる。すなわち、この年五月十日、江戸城本丸が全焼した。炎上のなか、奥勤めに上っていた甫賢の嫡女おてやが世話親花町ともろともに焼死した。弔問に訪れた人々や、お返し物の配られた人々のうちにみえる門弟関係の名に、樋口甫晋、浜田順庵、山本甫文、甫績、周てい、周績、南小柿宗宅な

どの名がみえる。ここにみえる樋口甫晋は樋口甫晋保利のことであり、周績は坂部周績包利のことであろう。このように姓・名・号ともを知ることができたとともに、新たに五名の門弟名を知り得たことは、今後の調査に役立ち得ることと喜びたい。なお、鶯軒文庫の写本には樋口甫晋の名を落としている。

また、人面瘡図そのものについての説明は前掲の『人面瘡図説』に詳しく、それに譲るが、鶯軒文庫の写本についての図と木版本図と比べると、写本図は筆写の筆が大まかで、およその輪郭を筆写したにすぎないのに比して、木版図の方が描線も細部にまでわたり、患部の状態をよく伝えているように見受けられる。

(一九八三・九・一六稿)